

# 接尾語「ずくめ」の仮名遣い

坂 梨 隆 三

旧稿（「近松の四つがなについて」岡山大学法文学部学術配要32号）において、接尾語「ずくめ」

の歴史的仮名遣いは「づくめ」よりも「ずくめ」とすべきことを併せて述べた。その後とくにそのことについて深く考えることもないままに十年近くが過ぎようとする。今日の信頼すべき辞書が「づくめ」説をとることはかわらない。

そして今、森岡先生の突然の訃報に接した。

ここでは旧稿の補訂を主として、詳しくは後考を俟つことにしたい。補訂の要点は、(一)近松の時代物に「づくめ」が一例見られること、(二)歴史的仮名遣いを「ずくめ」とする考えはすでに明治期の日本大辞書、帝國大辭典等にも見られるということである。用例を見ながら今少しそれについて考えることにする。

旧稿において近松世話物の「ずくめ」四例を示した。その注に語形のみを挙げた傾城酒呑童子の「ずくめ」は活字本によるものであったので以下それをも含め、時代物の例を丸本により初演順に示す。（目にふれたものだけであるがその限りでは「ずくめ」の

方が「づくめ」よりも多い。）

- (1) けふこそ五日帰りとて、むこの二の宮きをはつて、かな物ずくめの乗物に鎌倉やうの八人がた（曾我五人兄弟・二、八行本13ウ、元禄十二年、正本近松全集三、474頁。七・八行本19ウも「ずくめ」）

- (2) 其あひ馬の次信が後家、たとへかたきが馬ずくめ、こゝにぶをつけかしこにぶを打（源義経得葉経・四、八行本47オ、宝永三年、正本近松全集六・177頁）

- (3) よつてからめよとぞよは、れば両方門をはたとうち町々おこつて棒ずくめ、おきあがればたゞきふせ立あがればぶちふせ（加増曾我・二、十行本16ウ、宝永三年、正本近松全集六・442頁）

- (4) 道からかして帰るとは咄にも聞ぬこと、こちや義理ずくめになつたかところを上げて泣給ふ道理のうへの道理也（傾城反魂香・中・八行本44オ、宝永五年、正本近松全集八・381頁。七行本60ウも「ずくめ」）

- (5) 射とれや〜と矢さをそろへ、よこぎる雨と射かくる矢さき、さしつたりと小太刀をぬいてはらり〜ときりおとす、され共よろひのすきま〜矢すくめにすくめられ、今は是まで、(吉野都女楠・二、七行90丁本36オ、正本近松全集十・303頁)
- (6) もとめ塚の上にかけ上り腹きらんといたせしを、某矢すくめにしてうちふせ首取て候(吉野都女楠・三、七行本39ウ、宝永七年、正本近松全集十・310頁)
- (7) 君のお為をしらぬか、おため〜と渡刃がお為すくめのひねり針、漸虫をしづめける(弘徽殿鶉羽産家・三、七行89丁本42オ、正徳二年、正本近松全集十二・199頁)
- (8) 見よく〜平家にはふかせ源氏一統の御代となし、天下太平国繁昌五こく成就民安全、めでたいづくめにして見せんと(平家女護島・五、七行84丁本84ウ、享保四年、正本近松全集十・426頁)
- (9)、(10) はきはみやのきつ〜じか隅梅やさくららの花もみち、天より四季のしきせして、手かたの外の色すくめ、かねすくめなる身の茶花、金の冠をきぬ斗(傾城酒吞童子・四・五、享保四年、七行85丁本61ウ、正本近松全集二十・286頁)
- (11) 握てぶしに息吹かけ七ツハ十二三あたまもくだけとはり廻す、一子太四郎とんで出、そりや親父様なげた打ころせ大じない、まつかせと立かゝり家内がよつて棒すくめ、やうや

う長を引のくる(傾城酒吞童子・四・五、七行本79ウ、正本近松全集二十・322頁)

- (12) 横笛がかわりにて名も横ふよと呼からは、其まゝこつちのかゝへの内、てがたの運動さす、暇がほしくは五十頁に甘わりまし千貫つめ、男共横笛をとめ、親兄弟棒すくめにし追出せたゝき出せといふ所に(傾城酒吞童子・五、七行本85オ、正本近松全集二十・333頁)

- (13) ア、先々々先待給へ、大納言方へ殿を呼よせめのまへにてかゝせしと申からは、往生すくめにいか成なんだいかゝせしもしれず、ひらいて跡の返事(井筒業平河内通・三、七行87丁本45オ、享保五年、正本近松全集二十・429頁)

右(5)の「矢すくめ」は山田美妙「日本大辞書」(明治26年)、  
 藤井之助「帝国大辞典」(明治29年)も挙げるものであり、この「矢すくめにすくめられ」という言い方は「すくめ」と連用形「すくめ」の關係の近さを思わせるものである。「日本大辞書」は「すくめ」につき、

「すくめ(竦)ノ義、即チ其物バカリデ覆ヒ竦メル意」。スベテ、物バカリデ覆ヒスクメル体ノ義ヲ現ス語。

とする。(「帝国大辞典」も殆どこれと同じ。)

右(6)の「矢すくめ」も、多くの矢を射掛け、相手が自由に動けない(「身動きができない」)ようにするということだろう。(5)の

「矢すくめ」は「矢が体に何本もびっしりと突き刺さった状態」が想像されるけれども、さらに、そのことにより体が自由に動けないでいるという意を持つと考えるべきだろう。

(3)、(11)、(12)の「棒すくめ」、また、世話物の「棒すくめ」二例(「ぼうすくめ」曾根崎心中。「ぼうすくめ」薩摩歌)は、そのように解することによって初めて理解し得るものであろう。

参考までに評判記の例を二つ、また、「艶道通鑑」(正徳五年)から二例挙げておく。

(14) 其道屋みちやの親方、小判すくめにして、三つの年からもらひ朝暮大事にかけてそだてける程に(役者我身宝、江戸之巻、正徳六年、歌舞伎評判記集成六・145頁)

(15) 兄先の詞ことばをそむかずつやすくめにあしらふをよしとおもへる上うへがたよりは、一言いっごんで埒わちのあく当地のいきかた、なんと見たか皆みなのものと(芝居晴小袖、京注文、正徳六年、歌舞伎評判記集成六・235頁)

(16) 秘ひらはしき名を世上に流す事……其源を正せば無理すくめの婚礼より起れり(下、十九ウ)

(17) 外聞をおそれ義理すくめにかゝりては一季半季は顔面おんめん作り(下、二十オ)

さてそれでは、(8)の「めでたいづくめ」はいかに説明されるか。「めでたいづくめ」の意味は、「いいことすくめ」「新記録すく

め」「結構すくめ」などの現代語の「すくめ」に極めて近い。…でいっばいだ」の意味に置きかえられる。しかしこの「すくめ」も今日、「好ましくないものでいっばいだ」の場合は、「悪いことすくめ」とは言わず、むしろ「悪いことだらけ」のように「だらけ」で表すことが多いようだ。

近松のころ、もともと「すくめる(すくむる)」の連用形から出た「すくめ」だしよう。だとするとそれは、その物で覆って、(または、取り囲んで、取り巻いて)身動きがならないほどにする、というのが本来の意味であつたらう。あるいは、身動きがならないほどにその物で覆う、云々としてもよい。

もともとそれは、「棒すくめ」「矢すくめ」の如く、「棒ですくめる」「矢ですくめる」の形に還元し得るものであつた。すくめられる側からすればあまり好ましい文脈で用いられるものではなかつた。その「すくめ」の用法が広がり、「身動きが出来ぬほどにそれで覆われている。」から、「それでいっばいに覆われている。」となり、「(好ましいこと)でいっばいだ。」の意をも表すようになったものだろう。そうなるそれは本来の「すくめ」を一々想起させることがない。そういうところに「づくめ」の表れる下地もあつたといつてよからうか。

そういう下地は明治以後にもひきつがれた。大言海・大日本国語辞典など長く行われるようになった代表的な辞書が、「尽く+め」↓「づくめ」説を採つたことなどは、その後にも大きな影

響を与えたとと思われる。橋本進吉「助詞・助動詞の研究」79頁にも「づくめ」と見える。

実際、「づくめ」は、接尾語「づく」「づめ」と共通する意味を有するところもあり、旧稿でもふれたように、「づく」と「づめ」のコンタミネーションで「づくめ」が生まれたとする可能性も考えられはしよう。

しかしそれならばやはり、近松の丸本における「づくめ」に対する「づくめ」の優位についてもふれるべきである。

ここではくり返さないが、近松の四つ仮名で連濁によるものは、乱れがとくに少なかったのである。

たしかに、「づくめ」を「尽く」+「め」と解することには本当らしきが感じられ、これを、例えば現代の用例のみから判断するならばそれは確かに有力な説となる。然るに近世の用例に照らしてみるときなお一考すべき必要を感じるのである。

「すくめる」は今日、肩(首)をすくめる、射すくめる、抱きすくめる、のように用いられる。近松の時代物には次のような「攻めすくめる」の例もある。

かの文覚東大寺の二階樓に壇をかまへ、源の義朝公と書しる  
し本尊に立、平家調伏の行法まざれなき所、四方をつゝんで攻  
すくめ候へ共、たゞ者ならぬ文覚太刀かたなもゆる火も事とせ  
ず(平家女護島・一、正本近松全集十九、264頁)

「すくめる」(他動詞)の自動詞形は「すくむ」(四段)である。その連用形「すくみ」の接尾語的な用法もまた見られる。「立ちすくみ(あるいは「立ちすくみ」)」、「居すくみ」である。「立ちすくみ」は日葡辞書にも、タチズクミという項目があり、  
Tachizukumi nate xianru. (立竦みになって死ぬる)  
という用例がある。「居すくみ」は、

かふいへば忠兵衛をにくみそねむ様なれど、あずくみぞ、あの男が身の成はてががはいひ(冥途の飛脚、中、正本近松全集十一、42頁)

のように用いられる。これらはそれぞれ複合動詞が名詞化したものであるが、「——すくめ」を考える参考とはなろう。

接尾語「づめ」や「ぐるみ」も、もとはそれぞれ、「つめる」「くるむ」の連用形である。もと動詞の連用形が一般に複合語の造語成分として用いられること(「泥まみれ」「庭づたい」「粘土づくり」等)は極めて多い。「すくめ」が「すくめる」の連用形より出たとしても奇異ではない。

明治期、「すくめ」とする辞書もわずかにあつたが、やがて殆どが「づくめ」のみとなる。また、例えば、曾根崎心中の「ぼうすくめ」(正本近松全集四・550頁)についても、従来「尽くめ」とするもののほか、藤井乙男「近松全集」第六巻など、「すくめる」

とする注釈書もあるけれども、むしろ近時刊行の信頼すべき新しい注釈書の類は多く「尽くめ」説に傾いている。

「づくめ」、「すくめ」のいずれをとるかによって微妙なニュアンスの違いを生じるのであるが、本稿では敢て「すくめ」をとるべきことを述べたのである。

(東京大学助教授)

### 研究室受贈図書雑誌目録四

- 就実語文(就実女子大学) 第四号  
樟蔭国文学(大阪樟蔭女子大学) 第二十号、第二十一号  
上智大学国文学論集 第十六号  
女子大國文(京都女子大学) 第九十二号、第九十三号  
女子大國文(大阪女子大学) 第三十四号  
叙説(奈良女子大学) 第八号  
親和國文(親和女子大学) 第十七号  
人文(鹿児島県立短期大学) 第五号、第七号  
人文(京都府立大学) 第三十五号  
人文学報(東京都立大学) 第一六〇号  
人文学論集(仏教大学) 第十六号  
人文研究(大阪市立大学) 第三十四卷四号、第三十五卷三号  
成城國文(成城大学) 第六号

成城国文学論集 第十五編

清泉女子大学紀要 第三十号

説話(説話研究会) 第七号

専修國文(専修大学) 第三十二号、第三十三号、第三十四号

短大論叢(関東学院女子短期大学) 第六十九号、第七〇号

中央大学國文 第二十六号

中世文学研究(中四国中世文学研究会) 第九号

調査研究報告(國文学研究資料館) 第四号

通信(東京外国語大学) 第四十六号、第四十七号、第四十八号

鶴見大学紀要 第二十号

東横国文学 第十五号

東海学園國語國文(東海学園女子短期大学) 第二十三号、第二十四号

同志社国文学(同志社大学) 第二十一号、第二十二号

同朋國文(同朋大学) 第十六号

常葉國文(常葉学園短期大学) 第八号

富山大学人文学部紀要 第六号、第七号

富山大学教育学部紀要 第三十一号

名古屋平安文学研究会報 第九号

奈良大学紀要 第十一号

南山國文論集(南山大学) 第七号

日本語と日本文学(筑波大学) 第二号、第三号